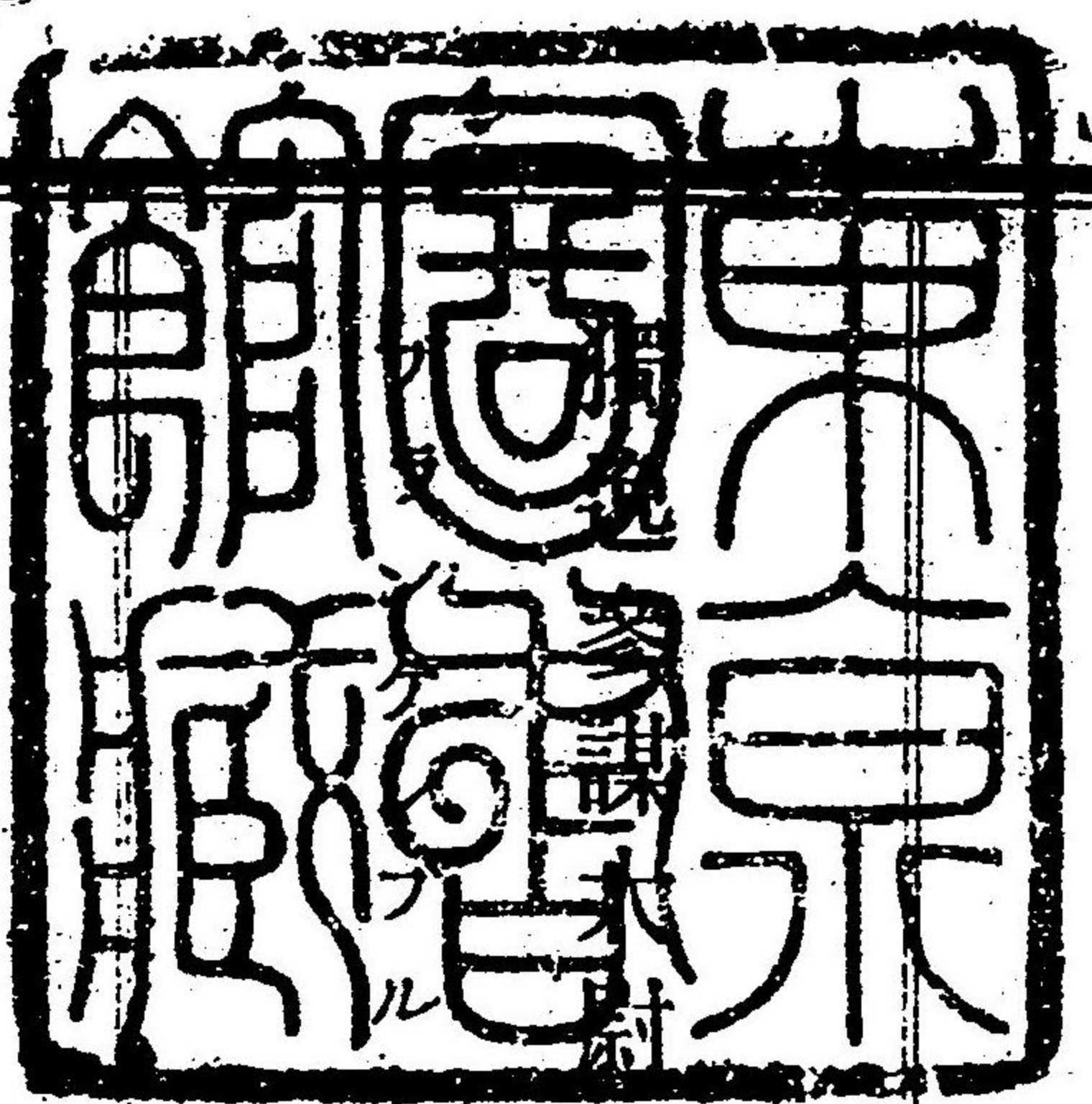


No. 11499

陸軍大學校用本



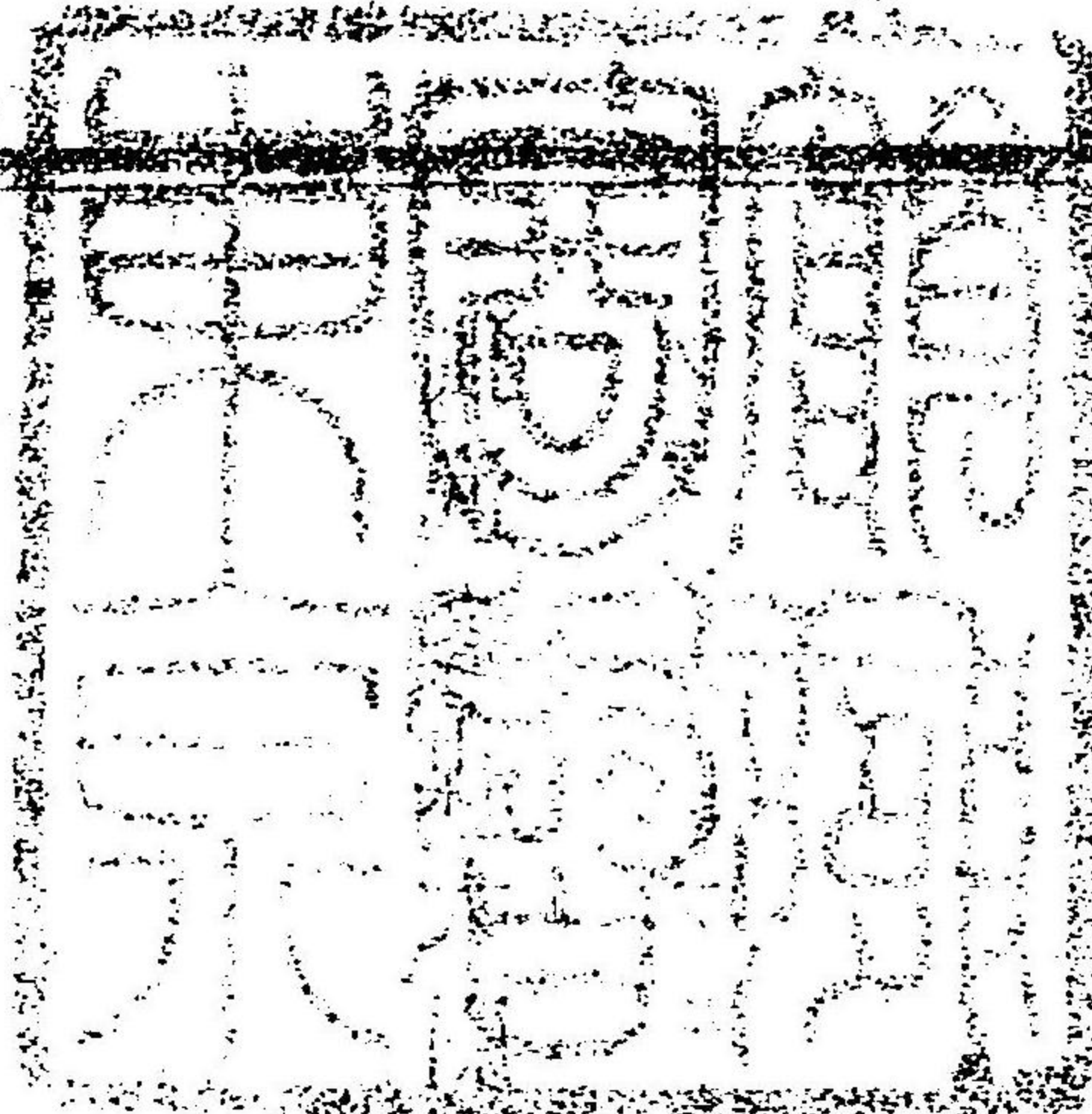
フオン、
氏講授

參謀服務實施 第二卷



明治廿一年六月

陸軍大學校教官
陸軍工兵大尉 落合豐三郎
陸軍歩兵大尉 榊原 忠誠 編纂

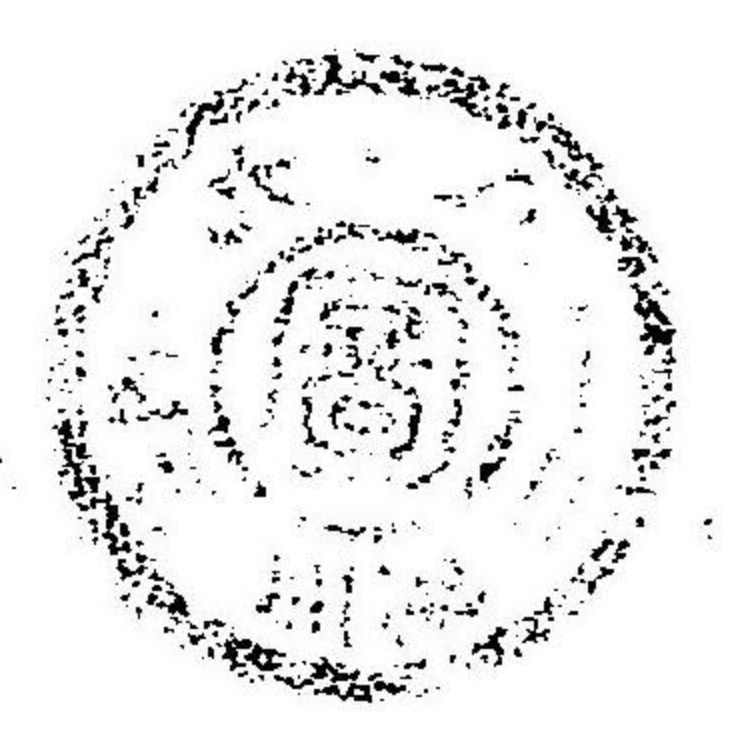


明治廿一年六月

陸軍大臣 大塚 副大臣 大塚
陸軍少将 大塚 参謀長 大塚
陸軍大佐 大塚 参謀 大塚

参謀長 大塚 参謀 大塚

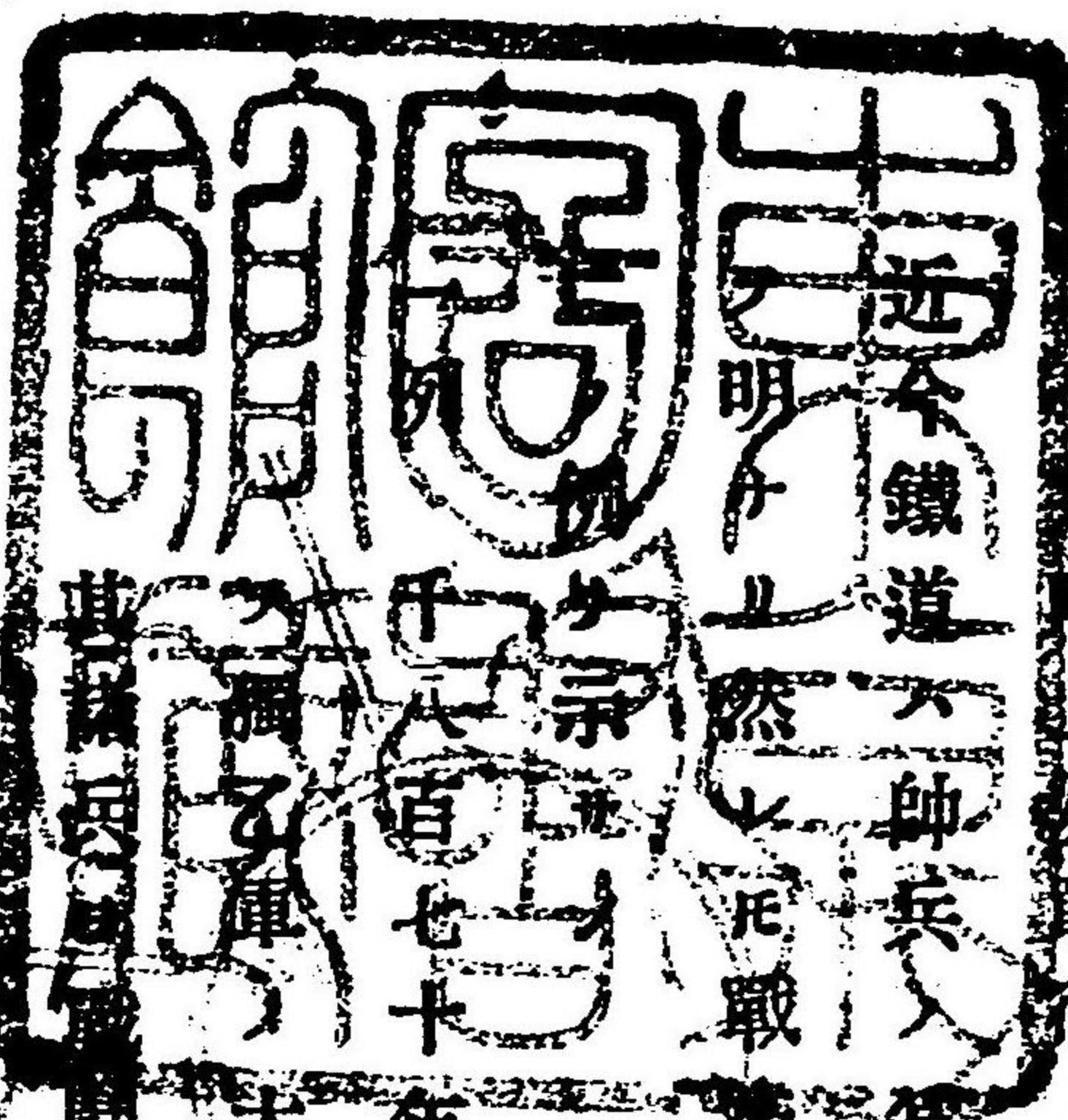
陸軍大學校 川本



参謀服務實施第二卷

鐵道之部附タリ海運ノ部ニ付テハ
及鐵道電線毀壞

兵略上及戰術上鐵道ノ關係



近不鐵道ノ帥兵ノ爲メ頗ル有用ノモノトナリ是レ實言ヲ要セズ
明ナリ然レテ戰術上之ヲ使用スルニ稀ナリ今戰術上ニ用ヒタルニ

千八百七十年ノ普佛戰記ヲ見ヨ八月六日ニ於テハ

ノ下ニ於テハ

大部分ハ已ニ舍營ニ就キガ戰起ルヤ鐵道ヲ以テ

其ノ因ニ關地ニ送レリ此軍隊ハ下車後サテ川ヲ渡テ高

地ニ登リ展開スルヲ得タリ素ヨリ其下車點ニ敵火ヲ連セ

ル地ニ撰メリ實ニ敵ノ發火ノ下ニ在テハ瀛車ニ運行スル能ハ

ズ尙且下車セシムルヲ最ニ不可ナリ

此日佛軍モ亦サントアホルドヨリフナルハヲ經テ援軍

鐵道輸送ヲ爲セトセリ然レ此列車ハ獨乙ノ斥侯及送射擊

隊内發火車裝リ爲テ目的ノ會戰地ニ赴クニシテ直ニサント

ハ此ノ點ニ於テハ鐵道ノ運送力ノ不十分トシテ舊金營地ニ還ル

ルニシテ例ニ依リ同戰役中巴里攻圍戰ニ於

テ鐵路ノ使用ヲ觀スルニ鐵道ノ戰術上ノ價值

ハ顯シク見出スルベシトシテ鐵道ノ戰術上

ノ價值ハ如何ナルカ

ニ對シテ是レノ點ニ於テハ鐵道ノ戰術上

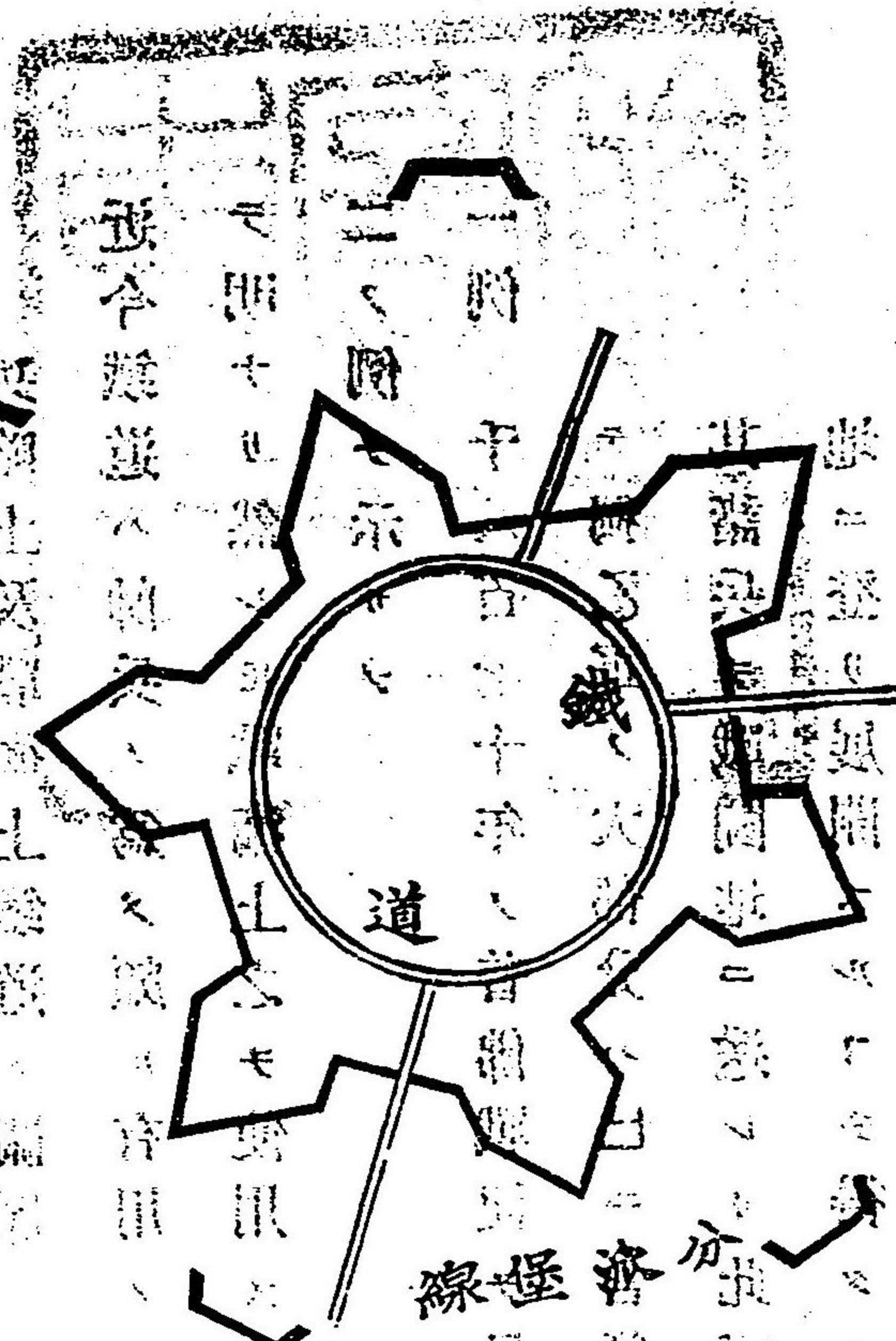
ノ價值ハ如何ナルカ

ニ對シテ是レノ點ニ於テハ鐵道ノ戰術上

ノ價值ハ如何ナルカ

ニ對シテ是レノ點ニ於テハ鐵道ノ戰術上

ノ價值ハ如何ナルカ



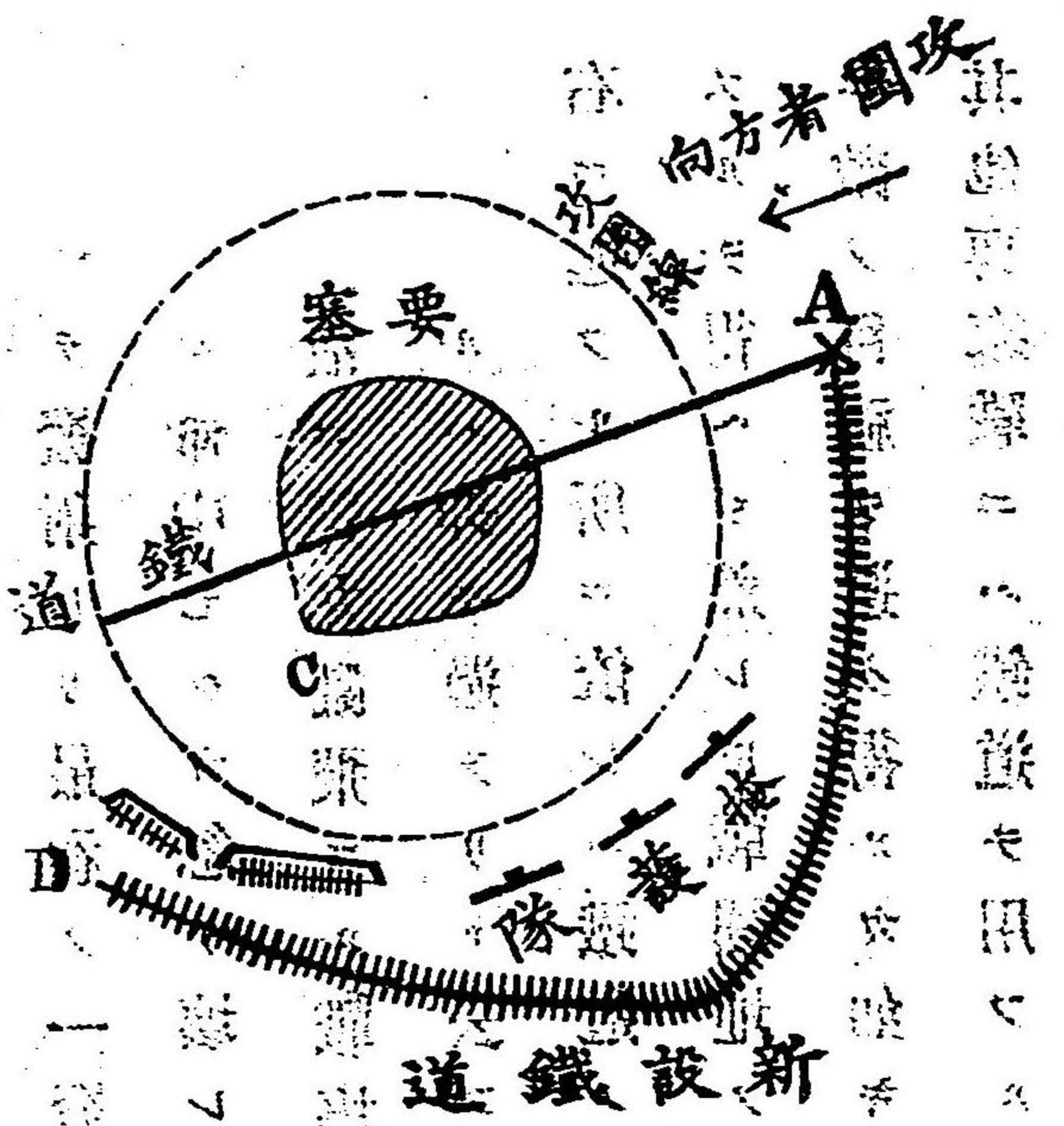
又巴里ニ於テ有名ナル工

鐵道ノ戰術上ノ價值ハ如何ナルカ

鐵道ノ戰術上ノ價值ハ如何ナルカ

鐵道ノ戰術上ノ價值ハ如何ナルカ

鐵道ノ戰術上ノ價值ハ如何ナルカ



此圖要略ニシテ、進攻セリトスルニ、○點ヲアリト假定シ、之ヲ攻撃點トシ、
 鐵道ハA點ヨリ
 新設鐵道ハB點ヨリ
 進攻ハ一旦之ヲ
 開始セ、時間斷ナク施行シ、敵軍ヲ可ラズ
 之レニ要領ヲ奪フ、巨多ニシテ
 鐵道ノ便ヲ籍ル、三非ナク、能ク其需
 要ヲ満足スル能ク、故ニ近今、至テ、若シ鐵道ノ布設便ナ
 クナルニ於テ、要領ヲ奪フ、鐵道ノ便ヲ籍ル、三非ナク、能ク其需
 要ヲ満足スル能ク、故ニ近今、至テ、若シ鐵道ノ布設便ナ
 攻撃點ヲ不重ス、則チ、此ニ對シ、

トオス左ニ日本ヲ以テ之ヲ例セントス
 昔々日本ニ於テ七師團アリ、而シテ六師團ハ各師團區ヲ有セ、出師準備
 容易ニ當テ、ハ此區内ヨリ補充ヲ爲ス、故ニ鐵道ナキモ或ハ期ニ後ル、
 第一、出師準備ノ難シクモ之有ハ、二日乃至三日ヲ利スルヲ得、
 近衛師團ヲ如キ補充ヲ全國ニ就テ爲ス、之ヲ在テ鐵道ノ便ナク
 ンテ之ヲ爲サント欲スルハ容易ノ事ニ非サルナリ、此場合ニ在テ
 鐵道ノ効用頗大ナシ、
 又更ニ進マテ軍隊ヲ下置關ニ集中シ、
 第三師團ハ速ニ第五師團ニ合シ、
 如キ鐵道ノ有無ハ其關スル所實ニ一國ノ安危ニ關ス
 夫レ外寇ニ對シテ一國ヲ防禦セント欲セ、其作戰計畫ニ應ジテ鐵道
 之敷設ヲ定メザルベカラズ、

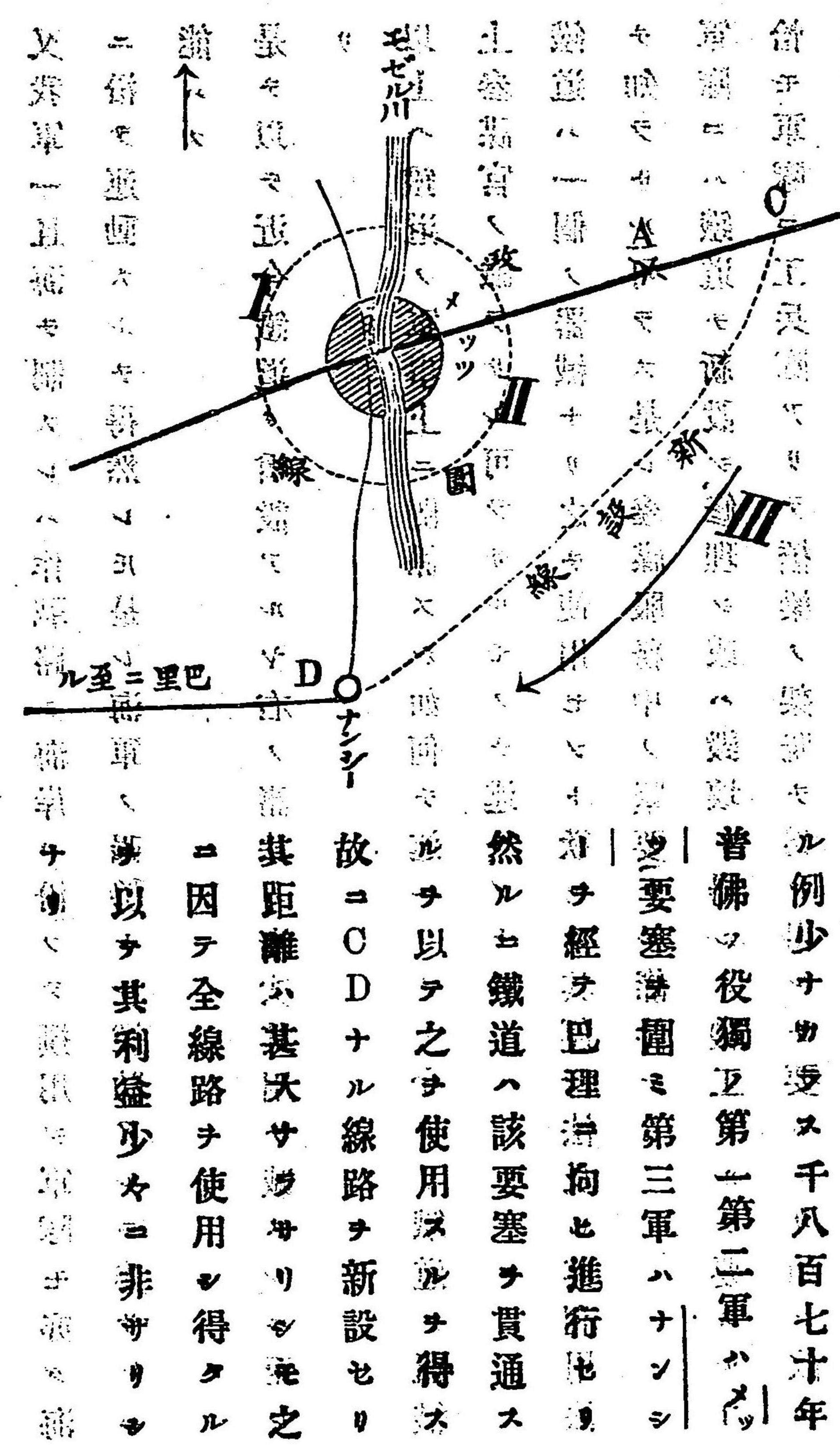
今南洋本主々中央ヲ貫通スル鐵道線路アリトセハ軍隊ハ此線路ニ沿
 ヲテ配置スルヲ要ス勦此地線何レシ地ハ雖速速軍隊ヲ集中スル運
 得ハシク陸軍、海軍ハ其國ハ、海軍ニ一國ノ交通ニ關ス
 抑モ遠征陣時輸運送ルニ運送多ク運送船ヲ要ス故ニ世界中何處ハ國
 ト雖海軍時時ニ萬帆艇生テ運搬ヲ得中運送船ヲ有ルハ國ヲ國ト運送
 シ之レ輸船ヲ輸送ル第六ノ上陸兵團來著スルハ多少ノ時間ヲ要スヘ
 シ
 是ヲ以テ本土ヲ噴通線鐵道線ヲ設テ敵軍第三上陸兵團線ヲ先カテ
 第一上陸兵團ハ優レテ兵力ヲ集中シ攻テ得テ又之ヲ擊破スル
 容易ナリ當テハ此國内ヨリ敵軍ヲ集メテ敵軍ヲ攻テ之ヲ擊破スル
 若シ敵軍如ク敵軍ヲ集メテ在國内唯在國内策ヲ採テ探テ敵軍ヲ
 シテ之ヲ日本モ以テ之ヲ集メテ之ヲ探テ之ヲ擊破スル

→ 各師團ハ各其駐屯地其地ヲ敵軍侵襲ヲ待ツ
 並ニ各師團徒步行軍ヲ以テ且地ハ葉谷多ク敵軍上陸ヲ待ツセ
 若シ敵軍策ヲ採ラシテ敵軍駐屯地ニ上陸シ各師團ヲ各個ハ擊ツテ
 謀ルハ此際他師團救之ヲ援助セシテ敵軍軍營或ハ其期ニ後
 一恐ハ利能ハシク之ヲ以テ當ニ敵軍ヲ探テ之ヲ擊破スル
 若シ敵軍策ヲ採取テカ敵ハ日本軍ヲ集中地其地最モ遠隔シテ上陸
 點ヲ撰ミ第二第三ノ上陸兵團ヲ待テ攻進シ來ルヘシ此時ニ當テハ其
 勝敗得テ期不可知ナルヲ以テ海軍ハ其國内ニ海軍ヲ集メテ其地ニ
 故ニ日本ハ其國内本土中央ヲ貫通スル鐵道ノ國防上ニ大關係ヲ有スル
 其地國内比ハ非シク其地ニ海軍ヲ集メテ其地ニ海軍ヲ集メテ其地ニ
 鐵道ハ最大効力ヲ實ニ集中其地ニ海軍ヲ集メテ其地ニ海軍ヲ集メテ其地ニ
 其地ニ海軍ヲ集メテ其地ニ海軍ヲ集メテ其地ニ海軍ヲ集メテ其地ニ

走レ軍兵行キスハ根據地ナカル可ラス而シテ此根據地ト作戰軍トハ
 常ニ交通ヲ斷テ可ク之即チ其兵站線ヲ鐵道ヲ以テ最良ノモノトス
 兵站勤務員人々知ル如ク材料ヲ作戰軍ニ送附シ或ハ傷者囚虜ヲ還送
 送ル等實ニ頻繁トシテ中央ヲ費シテ鐵道ノ國境ニ至ル迄ハ其
 往時鐵道線不充分ナルハ際シテハ河川及ヒ街道ヲ以テ兵站線トナセ
 然レ其難シニ二級三ノ上國境國境ヲ越テ交通シテ其
 近世英傑那烈翁第一ハ以太利在テハボリ河南獨乙ニ在テハタ
 ヌ馬大川流上流ヲ以テ常ニ作戰路トナセリ
 實ニ大船ヲ以テ輸送得ル場合在テハ道路輸送ニ比スレハ大利ア
 善ニ運搬容易ニシテ且ニ晝夜絶ス航行スルヲ得レハナリ
 道路輸送在テハ否スス一日中ノ幾部分ハ其行務ヲ停止セサル可ラ
 ヌ又其時間ニ往來距離其限ヲ超過スル能ハス

又我軍一旦海ヲ制スレハ作戰路ヲ海岸ニ沿フテ撰用シ軍隊モ亦テ海
 ニ沿テ運動スルヲ得然レハ是レ海軍ノ強勢ナル援助アリニ非サレハ
 能ハス
 是ヲ以テ近今鐵道ノ増設アルヤ右ノ諸法ヲ漸次其用ヲ減スルニ至レ
 リ
 以上ハ鐵道ノ軍事上ニ關係スル如何ヲ述ベシ今自リ鐵道ノ組織
 上參謀官ノ識ヲサル可ラサルモノヲ述ベシトス
 鐵道ハ一個ノ器械ナリ之ヲ使用セント欲セバ其運行法及ヒ其利用法
 ナ知ラサル可ラス是レ參謀服務中ノ緊要ナル條件ナリ
 軍隊ニハ鐵道ヲ新設シ修理シ或ハ毀壞シ得ルノ職工アルヲ要スルコト
 恰モ軍隊ニ工兵隊アリテ橋梁ノ架脱ヲ爲シ得ルヲ要スルカ如シ故ニ
 平時ヨリ鐵道隊ノ制ヲ設ケ其業務ヲ練習セシムルコトヲ要ス

戰時鐵道ヲ新設シテ利ヲ得



普佛ノ役ニ鐵道ヲ新設少カク濟西千八百七十七年以魯土戰役ニ於テ普魯軍屬々之ヲ爲セ殊ニ亞細亞地方ニ於テ最多ク其利ヲ得ル魯士亞ハ中央亞細亞者ハ波斯及ヒ印度ニ進入ス其爲メハ沙漠ヲ通過シテ可ラス此沙漠中ハ道路ナク河川ナク給養品ナク故ニ至所鐵道ヲ布設シ不烈兵站線トナサレルヘカラス魯國ハ軍事上ノ目的ヲ以テ多ク鐵道ヲ有テ多ク鐵道隊ヲ編成シ平時ヨリ之ヲ工事ニ使用セリ

歐羅巴内通ル魯國鐵道隊ノ新設セシ鐵道アリ
 今ニ魯國ハ西伯利亞ヲ貫通スル鐵道ノ布設ニ着手セリ
 戰時鐵道十分利用セントセハ鐵道隊ノ設ケナカル可ラス
 佛、伊、奧、魯ハ悉ク鐵道隊ヲ有ス就中魯國ハ多シ
 獨乙ハ北獨乙ハ一聯隊南獨乙ハ一大隊鐵道隊ヲ有ス

右の外參謀官ハ鐵道ヲ使用上ニ關スル線路構造ノ利害得失ヲ知ルヲ要シ其關スル首途ヲ定メ左ノ如キ事項ハ要ス

第一 鐵道ノ幅員
第二 鐵道ノ軌道
第三 鐵道ノ坡度
第四 鐵道ノ彎曲半径
第五 鐵道ノ材料ノ性質
第六 鐵道ノ運轉
第七 鐵道ノ行務人員
第八 鐵道ノ設備
第九 鐵道ノ單復
第十 鐵道ノ軍事上鐵道ヲ使用セザル欲モ先ツ材料ノ性質如何ヲ知ラサル可ラ
第十一 鐵道ノ機關車石炭車及客車等是ナリ
第十二 鐵道ノ機關車石炭車及客車等是ナリ
第十三 鐵道ノ機關車石炭車及客車等是ナリ
第十四 鐵道ノ機關車石炭車及客車等是ナリ
第十五 鐵道ノ機關車石炭車及客車等是ナリ
第十六 鐵道ノ機關車石炭車及客車等是ナリ
第十七 鐵道ノ機關車石炭車及客車等是ナリ
第十八 鐵道ノ機關車石炭車及客車等是ナリ
第十九 鐵道ノ機關車石炭車及客車等是ナリ
第二十 鐵道ノ機關車石炭車及客車等是ナリ

レ殊更ニ強馬力ヲ有スルモノナリ

抑モ何レニ國雖ニ鐵道ヲ新設スルニ當テハ材料及ビ路線ノ事項ニ關シ參謀官ノ意見ヲ附加セザルモナラズ

客車モ亦々軍事上ノ目的ニ適ハサル可ラス日本現在ハ步兵ハ爲ルモ尙モ稍困難ヲ免リス馬四行李輸送ノ爲メニハ殆ント用フル能ハサルナリ

去ル十月施行セシ參謀旅行ニ於テ學生某ノ偵察スル所ニ因レハ新橋國府律間ニ於テ目下使用シ得ベキ車輛ハ僅ニ二百十一輛ニ過キス而シテ其内荷物車ハ七輛ナリ又強テ馬四ヲ入レントスルキハ五十五輛ハ其用ニ供スベシト

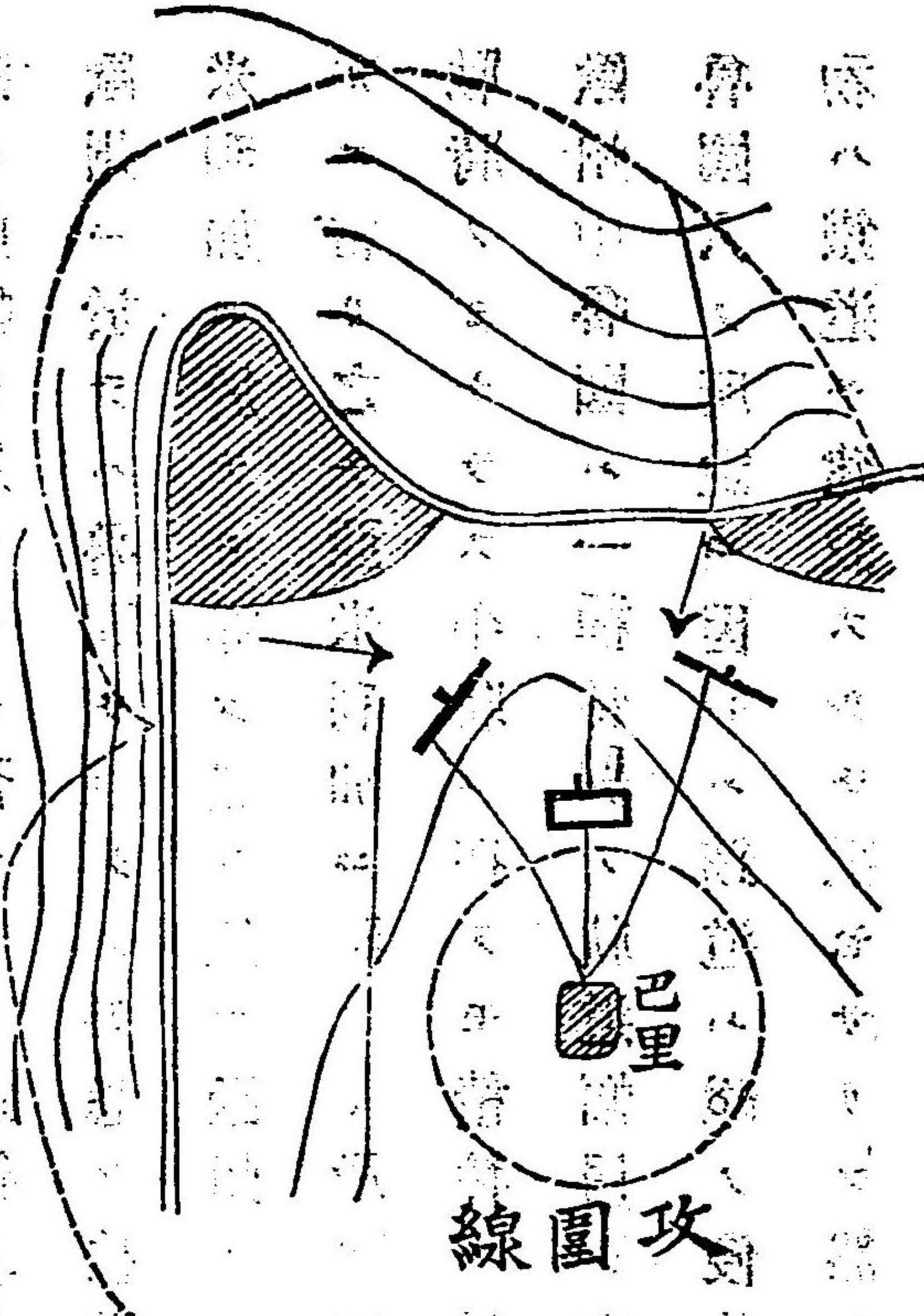
夫レ歐洲ニ於テ軍隊輸送ノ爲メニ用フル列車ハ百乃至百二十軸ヨリ成ル而シテ其列車ハ荷物人馬何レヲ擇ハス積載シ得ルヲ要ス否サレ

搬運行上非常不便者生久... 歐洲諸國... 日本... 積載... 運搬... 積載... 運搬... 積載... 運搬...

以上述べた如く軍隊輸送に列車ハ必ス荷物運送用ト可ク抑... 海岸ニ沿フテ作ル所ニ鐵道ヲ軍事上ノ目的ニ適セヌ何トナレハ... 海軍ニ對シテハ... 陸軍ニ對シテハ... 積載... 運搬... 積載... 運搬...

八、備以壞不如也。昔然。其。七十年戰役。於。佛軍。集中。宜。得。材料。之。缺乏。之。為。非。其。運行。法。之。研究。足。以。為。十。此。後。獨。軍。其。內。國。於。之。鐵。道。運。行。之。障。礙。之。佛。國。內。部。於。之。材料。之。不足。之。感。應。之。至。是。之。敵。其。材料。之。我。所有。之。歸。也。以。之。ナリ。

抑。也。永。久。鐵。道。之。破壞。之。為。先。之。術。王。物。之。毀。壞。其。後。方。若。干。距離。之。間。之。諸。材料。之。運。送。之。去。ル。モ。ト。之。之。為。種。々。困難。及。ヒ。材料。之。缺乏。之。生。ス。ル。之。由。也。七十年。於。之。佛。國。海。軍。之。獨。乙。海。軍。之。優勢。之。以。之。巴。里。圍。城。之。際。之。於。之。北。海。岸。之。海。軍。隊。之。上。陸。之。圍。攻。之。恐。ア。獨。第一。軍。之。之。慮。之。北。面。之。之。備。之。故。之。鐵。道。之。使用。益。繁。之。告。之。佛。



國。北。部。之。鐵。道。之。悉。之。占。領。之。著。之。材料。之。不足。之。鐵。道。材料。之。不足。之。為。出。師。準備。之。大。之。遲。緩。之。一。例。之。即。魯。士。最。后。之。戰。役。是。レ。之。魯。軍。之。千。八。百。七。十。六。年。十一月。十五。日。之。出。師。準備。之。令。之。發。セ。シ。モ。其。作。戰。軍。四。軍。團。之。集中。之。得。之。翌。七。十。七。年。四月。廿。四。日。之。反。之。普。佛。之。役。獨。乙。軍。之。二十。日。間。之。十六。軍。團。之。集中。之。作。戰。ス。ル。之。得。之。魯。軍。之。出。師。準備。之。際。之。材料。之。不足。之。困。之。俄。之。三十。七。之。機關。車。之。購買。之。熱。之。魯。國。之。歐。洲。他。之。諸。國。之。隣。接。之。之。以。之。之。為。ス。ノ。僥。倖。之。得。之。

然レ日本ノ如キ遠島ニ在テハ如此僥倖ヲ胸算ル能ハサルナリ
 軌道ノ幅員モ亦軍事上大關係ヲ有ス日本ニテハ已ニ一種ノ軌道ノ
 幅ヲ採用セリ故ニ今更ニ之ヲ改設スル能ハスンハ宜シク全國ノ鐵道
 悉ク此幅ヲ用フヘシ否サレハ運行上大ナル不都合ヲ生スヘシ
 歐洲ニ於テハ魯國ヲ除クノ外悉ク軌道ノ幅同一ナルモノヲ採用ス亞
 米利加ニ於テモ亦タ然リ故ニ歐洲ノ一會社ニ於テ材料ヲ求メントス
 ルニ當リ之ヲ亞米利加ニ購フモ敢テ支障ナシ此同幅軌道ヲ用フルハ
 戰時ノミナラス平時ニ在テモ積替ヲ爲サ、ルノ便アリ
 歐洲中魯國ハ一種特別ノ軌道幅員ヲ有ス是レ所以ナキニ非サルナリ
 魯國人ノ所説ニ因レハ鐵道ハ敵ノ侵入ヲ速ニスルモノナリト故ニ最
 初ハ鐵道ヲ建設スルヲ欲セサリシ然レモ哥利米ノ戰役英佛伊同盟軍
 ハ十二万ノ兵員ヲ哥利米ニ上陸セシメタリ然ルニ魯國ハ鐵道ナキナ

以テ之ヲ擊退スヘキ兵員ヲ集中スル能ハス終ニ大ニ敗績セリ
 是レヨリ後魯國ハ鐵道ノ要用ヲ感シ之ヲ新設セント雖モ尙ホ敵ノ利
 用セシテ恐レ其軌道ノ幅ヲ他國ト異ニセリ此ヲ以テ戰時ニミナラス
 平時ニ於テモ大ニ不都合ヲ生ス現ニ國境ヲ超ヘテ他國ニ交通スベキ
 モ、ハ唯僅ニ急行列車アルノミ此列車ハ車轍ノ幅ヲ伸縮シ得ル如ク
 製作セリ然レモ是只旅客ノ用ニ供スルノミ
 此誤見アリシカ爲メ魯國ハ千八百七十七年土國ト戰フニ當テ軍隊ノ
 征行ニ至大ナル困難ヲ感シタリ即チ國境ニ至テ列車ハ積替ヲ爲サ、
 ル可ラス之レカ爲メ大ニ鐵道ノ効用ヲ減シ且ツ運搬ヲ困シメタリ
 其他軌道ノ幅小ナレハ積量ヲ減セサル可ラス否サレハ重心ノ位置不
 良トナレハナリ故ニ運行ノ効程減少ス
 又軌道ノ幅小ナレハ列車ノ長モ亦之ニ應シテ短ナラザル可ラス

夫此大幅軌道ト小幅軌道ト其効程ノ差大盛シテ其構築費ノ差
 僅少ナリ例々ハ橋梁隧道ノ始末多少其幅ヲ増減シテ構築スルモ費用
 上敢辨差差辨ホナリハ蓋最モ多シクハ百萬ト云々ハ其心ノ道
 故巨軌道大幅ト如キ世界普通ノモ以テ採用スル英利トナス是レ何レ
 諸國ニ就テモ其材料ヲ得ルヲ便アレ國ナリニハ機車ノ動力
 線路ノ傾斜モ亦運行上關係ヲ有スル事土質ノ堅軟ニ依リテ
 傾斜百分之一ハ尋常軍用列車ヲ運行シ得ル度トス然レハ六十分一ノ
 傾斜ヲ登リテ降ルニハ機關車ヲ増加セラルカ又ハ之ヲ降ルニハ列車ヲ
 分離セラル可ク又ハ降ルニハ機車ノ動力ノ減弱ニ由リテ
 時トシテハ大ナリ傾斜ヲ有ル線路ナキニ非ズ然レハ是只旅客ヲ用
 供供ナルヲ爲シテ貨物運搬ノ爲メニ非敵敵ハ軍用且テ目的ノ適
 大ニハハ機關車ノ動力ノ減弱ニ由リテ大ニハハ機關車ノ動力ノ減弱ニ由リテ

鋸齒軌鐵

甚キ傾斜ノ線路ニ在テハ三軌鐵ノ中間更ニ鋸齒形ノ軌鐵ヲ布設ス
 如此鐵道ハ海岸防禦ニ於ケル
 送スル場合ニ用フルトアルハ
 然レハ軍事上軍隊輸送ニ就
 テ用キ能ノトス



又鐵道ノ曲形ヲ運行上大關係ヲ有スルハ
 曲形ノ半徑ヲ以テ示定スル事
 此曲形ハ軌道ノ幅ト半徑トノ比ニ關ス半徑小ナル時當テハ軌鐵ノ幅
 小ナル事良トス然レハ半徑大ナルハ軌鐵ノ摩軋力減スルヲ
 雖も運行上便ナリ
 又曲形ハ機關車客車等ノ結構ニ關係ヲ有ス現今日本ニ用フル所ニモ

大則悉分二軸ヲ成ル是レ鐵道ノ半徑小ナルヲ以テ止テ得サレナリ
 歐洲ニ於テ軍事上ニ用フル材料ハ概テ三軸ヨリ成ル
 又半徑小ナルハ長列車ヲ用フル能ハス
 此場合ニ在テハ長列車ヲ用
 時ニ於テ傾斜曲形ト共ニ有ルコトヲ此場合ニ在テハ長列車ヲ用
 出能能ク何レニ以テ機關車ヲ增加スルモ其効ナシ抑モ機關車ノ曳
 力與客車ト平等ニ附與スルニ其列車ハ相連リテ一直線ヲナスニ如
 クモノナシ然ルニ其列車曲線ヲ畫クニ機關車ノ力ハ只列車ノ端末
 ニ與フルヲ得ルノミ今若シ後推機關車ヲ增加スルモ列車中某點ニ至
 ル迄ハ其力ヲ及ホスヲ得ヘト雖モ中央ノ客車ニ至テハ其力ヲ及ホ
 ス能ハスレテ其車輛ハ終ニ軌鐵ヨリ脱出スルニ至ルモ是レ危險モ
 此危害ハ鐵道運行上最モ恐ルヘキモノ也是レ單ニ列車ヲ破壊ス
 其トモ對テス他別列車ヲ運行妨ク事至ルニ至ルモ是レ危險モ亦大

此ノ如キ損害事起セシハ平時ト雖モ少ク然レ三日間運行ヲ止メ
 ナル可ラス況ンヤ戰時ニ於テチヤ
 故ニ半徑小ナル曲形及ヒ大傾斜共ニ有スル線路ヲ軍用上使用スルコ
 稀ナリ
 又橋梁ノ負擔力及ヒ隧道ノ幅ハ鐵道運行上ニ關係ヲ有ス
 橋梁ノ負擔力ハ工程師以テ測算スル所ナリ然レモ全線路中一橋梁ノ負擔
 力弱キニ至ルニ全線路モ亦タ使用スル能ハサルニ至ル
 隧道中在テハ其断面ニ注意セサル可ラス即チ其断面ニ依テ積載物ノ
 高さ制限セラル故ニ多クノ荷物ヲ運送スル線路ニ在テハ停車場ニ隧
 道本形ニ稍小ナル木製ノ構形ヲ作リ以テ試檢ノ用ニ供スルニ
 鐵道線路ヲ單復ニ鐵道ノ効程ニ大關係ヲ有ス
 鐵道ノ運行ハ終始循環究極ナキカ如クモセサル可ラス之レガ爲ニ復

線路設法亦可設法然レ此所々ニ避危線ヲ設クレハ單線ト雖モ亦復循環運行ヲ爲シ能ハシ然レ非モ然ラズ但シ如此セハ一列車ハ他送列車通過待ツノ時間又減少以テ復線ニ比スレハ其効程二分一以内ニ減縮スルベシ也然レ此等ノ點ニ對シテ復線ノ必要ナルハ平時ハ故軍軍事上ヨリ論ズルモ鐵道ハ必ス復線ナルヲ要ス然レ平時ハ單線ヲ以テ足敷ク上スルコト往々アリ此ヲ以テ歐洲ニ在テモ軍事上甚難緊要時有レテ此線路ヲ單線ヲ使用ス然レモ獨乙國ノ如キハ陸軍省ヨリ特命令下シ橋梁ヲ隧道ニ必ス復線ヲ設ケシム

又橋梁隧道ノ如キ術工物ハ少許ノ作業ヲ以テ交通ヲ遮斷シ得ル如ク構造亦然レモ最難緊要ナル橋梁ハ特許橋頭堡ヲ設ケテ之カ掩護トナス

停車場ニ亦モ軍事上ニ關係ハ有テ殊ニ單線ノ鐵道ニ在リテ停車場ニ

避危線ヲ設クルヲ要ス而シテ此避危線ハ軍用列車ノ長サヲ有セザル可ラズ歐洲ニ於ケル軍用列車ノ長サハ四百五十米乃至五百米トナス現今日本ニ於テ見ル所ノモノハ二百乃至二百五十米ニ過キズ要スル

併シ之ヲ伸長スルヲ得ハト雖モ高低錯雜ノ地ハ線路急造頗ル困難ナリ

又停車場ハ軍隊積卸自在ヲザラズ故ニ停車場構築モ亦太平時ヨリ軍部ニ於テ注意セザル可ラズ

軍隊積卸ヲ爲ス停車場ニハ待避線ノ外多クノ死線ナカル可ラス又乗降場ノ設ケアルヲ要ス

乗降場ハ歩兵ト雖モ欲ク可ラス況ンヤ車馬ノ積卸ニ於テチヤ即チ列車ニ等シキ長サヲ有スベシ

巨大ノ材料ヲ積卸スル停車場ニ在テハ此乗降場ノミヲ以テ足レ



乗降場ヲ設ケ縦方向ヨリ之ヲ積卸セ
日本ニ於テハ車馬ヲ運送スル少ナキ

及大部隊ヲ運行スルニハ死線及ヒ乗降場ノ設ケ饒多ク要スル不
キナラズ尙近傍ニ列車整頓線ノ設ケアラサル可ラス即チ軍隊ノ積卸
ヲ爲シ停車場ハ少クモ一二線アルヲ要ス實ニ列車ヲ整頓スルハ大



又停車場ニハ機關車ヲ
爲メ特ニ種々ノ設ケヲ

爲メニ水石炭ヲ補給灰ヲ除却等ノ爲ナリ
通常機關車ハ一時間ニ三乃至四立方米ノ水ヲ要シ三百乃至四百吉
石炭ヲ費スルハ其ノ概シテ同一機
又機關車ハ屢々掃除ヲ爲シ且之ヲ検査セサル可ラズ概シテ同一機
關車ハ百二十乃至百五十吉米ヲ長ク使用スルモ其ノ非スルニ
軍事上ニ討論スレハ如此準備整頓セシ停車場ノ位置如何ハ鐵道ノ効
程上大關係有ク
頭首停車場ノ如キハ可成之ヲ避クルヲ要ス是レ鐵道ノ効程ヲ減スル
ト大ナリ
又電信ハ鐵道ノ運行上大關係有
停車場
頭首停車場
大實ニ電信ハ氣車ノ爲メニ吉凶

停車場ハ其數多キヲ要ス何トナレハ甲乙發車場ヨリ來ル所ノ列車ハ此所ニ於テ互ニ待避セサル可ラス故ニ停車場ノ數多クハ從テ列車ヲ多ク發送スルヲ得是レ素ヨリ單線ニ就テ險ナル所ノモ大ナリ然レハ複線ハ鐵道ニ於テモ亦タ然リ人或ハ云フン複線ニ在テハ互ニ危避ヲ斷ル要キヲ以テ停車場ノ數ハ鐵道ノ効程ニ關係ナシ此說最モ非ナリ抑モ危險ナク鐵道運行ヲ爲サント欲セハ甲地ヨリ乙地ニ至ル先待列車已ニ乙地ニ達シ無事到着ノ報來ル非サレバ況テ列車ヲ發送スル能ハス故ニ各停車場ニ距離遠クハ從テ各列車ヲ發スルニ長時間ヲ隔テテ可ク大即チ鐵道ノ効程ヲ減スルニ至ル一因之ハ因テ見レハ複線ノ鐵道ニ在テモ停車場ノ數多キヲ要スルヤ明無常職關テハ停車場ニ代テ電停ヲ通シ得ルノ設ケテ爲ス可ス即チ電停停車場ヲ稱シ得キ假シテ設クルニアリ然レハ線路

中若シ不幸ニ釀スヨレモ之ヲ援助スル機械材料ナキヲ以テ實際鐵道ノ効程ヲ大ニ減スル能ハス故ニ軍用鐵道ニ於テハ複線ヲモ大ト雖モ其間隔多キヲ要ス而シテ其間隔以テ同ナレバ若シ其間隔不等ニシテ短小ノ間隔ニ因テ得ル所ノ利益ヲ長大ナル間隔ニ爲メニ全ク消滅セザル夫レ材料ハ所要ニ際シ他ノ線路ヨリ之ヲ補足スルヲ得ヘシ然レハ停車場ノ如ク戰時ヨリ之ヲ建設セザル可ク戰時ハ國ノ國ハ其間隔多キヲ要ス單ニ戰時通用ノ鐵道ニ在テハ其交通ノ頻繁ナル路線ノ外停車場及ヒ材料ヲ多キヲ要セズ故ニ軍事上ノ鐵道築設ニ在テハ平時ノ交通如何ヲ顧慮セサル可ラス國ノ國ハ其間隔多キヲ要ス魯國ノ如キハ嘗テ軍事上ノ目的ヲ以テ鐵道ヲ築設セリ然ルニ實際之ヲ使用スルニ當テハ忽チ材料ニ不足ヲ告ケ爲テ其効程ヲ減ス

此其甚クシカリシ故ニ頗ル喫驚セリ然レモ是レ其平時ノ交通ヲ顧
 視シテモシテ魯入カ鐵道ノ用法ヲ知ラザリト云フ因ルナリ
 獨佛以テ如ク人口多キ國ニ在テハ例ヘ軍事上ノ目的ノミナリテ鐵道
 ナリ作ラサレモ其平時ノ交通頻繁ナルヲ以テ之ヲ直ニ軍事上ニ用ユル
 事其効程著シクハ鐵道ニ對シテ其効程ノ大ナルヲ示シテ居ル
 以上述フル所ノ諸件ヲ熟考セテ其某線ノ鐵道ハ幾何ノ効程ヲ有スルヤ
 ナク測算スルヲ得ヘシト云フ事ハ鐵道ノ効程ノ大ナルヲ示シテ居ル
 予カ茲ニ述フル所ノモノハ總シテ大部隊運行ヲ爲メナリ予ハ想定ス後
 來日本國於テ青森ヨリ馬關ニ至ル本土中央ノ鐵道ノ布設アラザラシ
 然ルモ此此要用ヲ感スルノ頗ル大ナルニ至ラズ鐵道ノ効程ヲ定メ
 三ハ先ニ一日ニ幾回ノ列車ヲ發シ得ルヤヲ考定セサル可ラス是レ材
 料ト停車場ノ數及ヒ其距離ニ原因スルニ對シテ鐵道ノ効程ヲ定メ
 得ルヤヲ考定セサル可ラス是レ材

歐洲諸國兵家ノ著書悉見ルニ線路ノ單複ト停車場ノ距離ト効程ト大
 關係有スルヲ論テ材料ノ多少ヲ論スルモノ稀ナリ是レ其著者ハ
 材料ヲ欠乏ナキノ國ニ居住スルヲ以テナリ之レニ反シテ鐵道創業ノ
 國ニ在テハ然ル能ハサルナリ
 又一列車ハ車輛幾軸ヲ編綴スルキヤヲ定メサル可ラス
 軸數ハ最大限ヲ取ルヘシ而シテ各列車ノ搭載力ハ殆ント同一ナルヲ
 要ス且ツ軍隊ヲ建制ヲ破ラサルニ注意スヘシ
 歐洲諸國ニ於ケル一列車ハ步兵一大隊或ハ砲兵一中隊ヲ搭載スルヲ
 得騎兵一中隊ハ一列車ノ爲メニ過少ナリ故ニ一時建制ヲ破ラサル
 ヘカラス然レモ后速ニ之ヲ服スルノ處置ナカレハカラス
 凡ソ事ニハ例外アリ故ニ參謀將校タルモノハ其時期ヲ斟酌セサル可
 ラス

出發地ヨリ到着地ニ至ル列車ニハ奇數ノ番号ヲ附シ之レヨ反スル列車ニハ偶數ノ番号ヲ附スルヲ緊要トナス是レ一停車場ヨリ他ノ停車場ニ電報ナルニ當テ第何号列車ハ到着セリ或ハ出發セリト云ハル其方向ヲ指示セザルモ自ラ之ヲ知り得ヘキヲ以テナリ

乗車下車ニハ必クモ二階ヲ費セテハ計算セザルト云フ不思シ購票停車場ノ廣大ヲ知ル所ナリ

各列車ノ永キ待避ハ中間ノ小停車場ニ以テ爲スヨリモ寧ロ發着ノ大停車場ニ於テ爲ス長ク然レハ線路延長ナルヲ至テ發着ノ如ク大能ハ然レバ此時間ヲ軍隊ハ爲テ利用スルヲ要スル此時大に食事等ヲ如ク故ク如此停車場ヲ給養停車場ト名付テ置ク事ハ殊車運行表ハ其運行凡ソ四十時以内ニ終ルモノハ其時間中ノモノヲ作ルベシ然レバ大軍隊ノ運行ニ利便ナルヲ要スルハ唯一日ノ運

軍用瀛車發車表ノ例

日 時		各停車場間ノ距離		
時間	A	B	C	D
	距離 6.8 キロメートル = 28 分ヲ要ス	距離 20.5 キロメートル = 28 分ヲ要ス	距離 8 キロメートル = 8 分ヲ要ス	
午後				空車第二十二
午後	18 ⁰⁰	満車第壹	空車第二十二	
	18 ¹⁰	空車第二十二	満車第壹	空車第二十四 満車第壹
午後	18 ²⁰	満車第三	空車第二十四	
	18 ³⁰	空車第二十四	満車第三	空車第二 満車第三
午後	18 ⁴⁰	満車第五	空車第二	
	18 ⁵⁰	空車第二	満車第五	空車第四 満車第五
午後	19 ⁰⁰	空車第四	空車第四	
	19 ¹⁰	空車第四		空車第六
午後			空車第六	

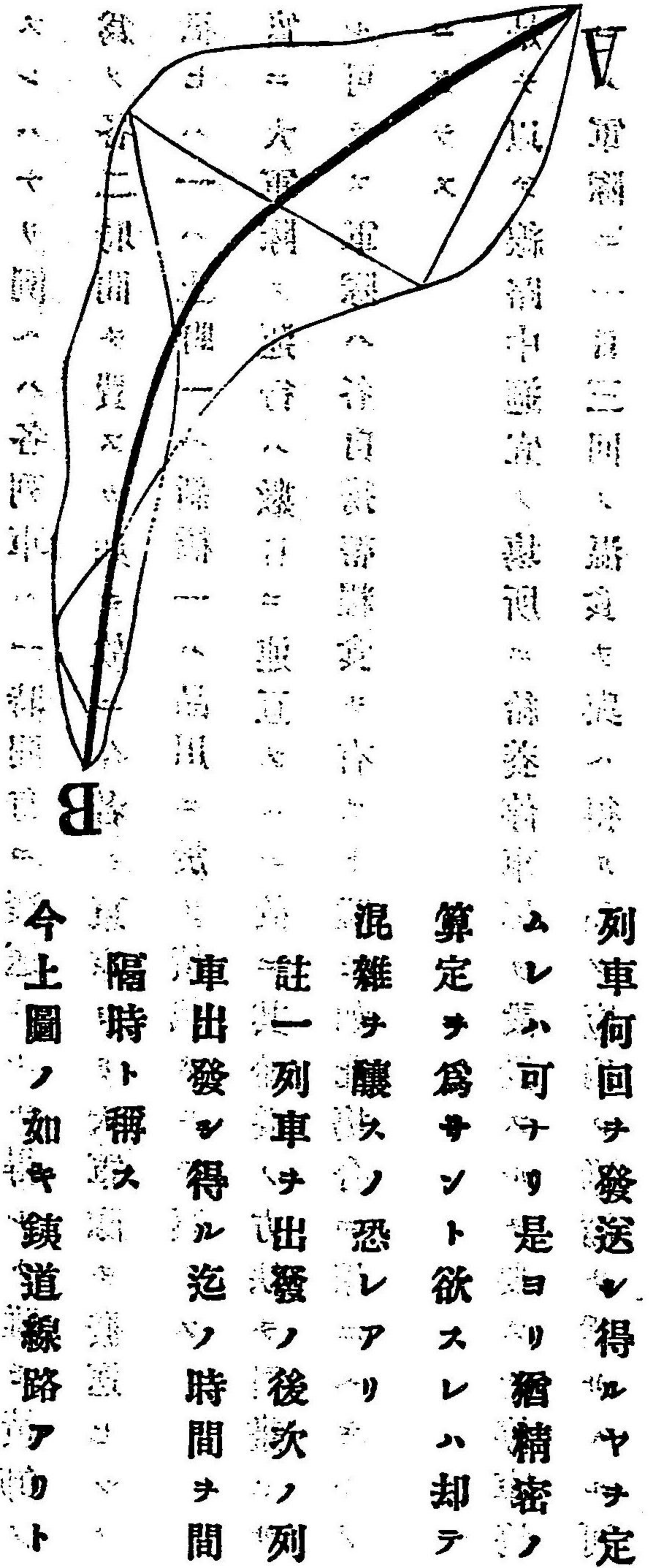
- (一) 軍隊ノ運搬ハAヨリDマテトス
- (二) 満車ハAヨリDマテ發ス故ニ各満車ハDヨリAニ達スル空車ノ一ニ相當ス
- (三) 満車ハ奇數ニシテ空車ハ偶數トス
第一列車ハ満車トシテ發シ空車トシテ歸リ來ル
- (四) 満車及ヒ空車ハ五ニ避クヘシ即チ一線路ノ片ニハ一列車ハ他ヲ避クヘシ此ノ避クルトハ唯ク二線路ノアル所ノミニ於テナシ得ヘシ即チ停車場ニ於テス
- (五) 停車場間ノ最大ノ距離ハB及ヒCノ間トス
各列車ハ此間ヲ行クニ二十八分ヲ要ス各停車場ニテ列車ヲ停止スルハ二分間宛トス故ニBトCノ停車場ノ間ニハ唯ク三十分毎ニ一列車往復シ得ヘシ即チ三十分毎ニ一満車若クハ空車ノ通行スルヲ得ヘシ
- (六) 然リトモ各満車ハ空車ノ歸リ來ルヲ待タサルヲ得サルヲ以テBヨリC迄ニハ唯ク六十分毎ニ一満車ヲ發スルヲ得行シ得ルヲ以テ全距離ニ各六十分毎ニ一列車通行スルヲ得何トナドモ若シ満車第三号ヲAノ停車場ヨリ空車第二十二号ノ着後二分間ニ空車セシメントセハ十二時四十分ハ發車シ且ツBノ停車場ニハ既ニ十二時五十分ニ着シ得ヘシト由ル此列車ハ二分代リニ二十分ヲB停車場ニ於テ待タサルヲ得是レ此列車ハ空車第二十四号ト一時十九分後ニテ發シバBノ停車場ニテ避クルヲ得サレバナリBトC間ノ距離ハ則チ十二時五十分ヨリ一時十九分迄ハ空車第二十四号之ヲ充塞ス
- 故ニ満車第三号ハAヨリ一時發スル代リニ已ニ十二時四十分ニ發車スルノ必要ナシ

行旅ヲ製シテ以テ毎日同一ノ運行ヲ爲スモノトス
夫レ大軍ノ運送ニ可成混雜ノ方法ヲ避クベキナリ
今東京國府津間ノ鐵道運行表ヲ就テ一言ヲ述ス此線路中停車場
最大間隔ハ平塚上藤澤ニシテ一三〇及七五ナリ之ヲ一三〇米ト概算
スルヲ要ス一吉米ヲ三分ト三分ノ二ノ速力ヲ往クトセハ列車ハ此
間ヲ三十五分ヲ經過スルニ藤澤及平塚ニハ各一分宛停止スルモ
ノトセハ一列車ヲ三十六分ヲ以テ藤澤ヨリ平塚ニ至ル他ノ一列車
亦同時間ヲ以テ平塚ヨリ藤澤ニ來ルヲ得之ヲ因テ見ル東京國府
津間ノ列車ハ七十二分毎ニ發送スルヲ得故ニ一日ノ一時期即チ四時
間ニハ三回發車セシムルヲ得二百四十分ヲ七十三分ヲ除シタル殘
餘ノ端數ノ如キハ措テ問ワサルナリ
又新橋横濱間ハ複線ナルヲ以テ途中停車場員使止セテ互ニ避行

運送タル軍隊ヲ増援セシムル場合ニハ先づ砲兵ヲ送リ次ニ歩兵
 ヲ送ルル也此場合ニ在テハ騎兵ハ最後ニ送ルルモ可ナルアリ
 又七十年普佛大役ニ於テハ先づ歩兵ヲ送レ其兵ヲ
 要スル急務ニテ且其距離ハ短近ナリテ以テナリ此場合ニ於テ若シ
 砲兵ヲ送ラントセハ積卸ニ空ク四時間ヲ費スル故ニ此時間ヲ以テ
 行軍ニ於テ優レリトス
 又大軍ヲ輸送スル在テハ輜重ヲ一部ニ其中間ニ挾公ニ要スル場合ナリ
 即チ野戰病院彈藥縱列等是レナリ時トシテ其糧食縱列モ亦然リ是レ
 倉庫建設等ヲ用ニ供スルモノナリ極メテ便利ナル數停車場ヲ擬シ要スル
 伏軍ヲ運送スルニ當テハ極メテ便利ナル數停車場ヲ擬シ要スル是レ
 軍隊及ヒ物料ヲ積卸ト要スル時間ハ列車發着ノ時間ヨリ多キナ常ト

スレハナリ例ヘハ各列車ハ一時間毎ニ發送スルヲ得ル積卸ノ
 爲メ各二時間ヲ費スカ如シ故ニ今若シ東京ヨリ大軍隊ヲ發送セント
 欲セハ一ハ上野一ハ新橋一ハ品川ニ於テ積載スルヲ長クス
 實ニ大軍隊ノ運行ハ數日ニ連亘スヘシ故ニ其給養ノ方法ヲ計畫セザ
 ル可ラス軍隊ハ各自携帯糧食ヲ有スト雖モ如此場合ニ用ユヘキモノ
 ニアラス
 是ヲ以テ線路中適宜ノ場所ニ給養停車場ヲ設置スルヲ要ス此停車場
 ニハ軍隊ニ一日三回ノ温食ヲ與ヘ得ル如ク庖厨ヲ準備ヲ爲サハル可
 シ又軍隊ハ此停車場ニ於テ少ク一時間ノ休止ヲ爲ス故ニ停車場
 係亦廣大ナラザル可ラス
 大軍隊ヲ連續運行ハ途中支障ノ爲メ屢々停滯ヲ生ズルアリ故ニ之ヲ
 回復スルヲ時間ヲ設ク置カザル可ラス

歐洲ニ於テハ毎日運行時間即チ二十四時間中四時間ヲ以テ回復ノ
預備時間ト計ル之ヲ日行間隔ト稱ス細説スレハ二十四時間ヲ六期ニ
分チ第六期ヨリ第五時期ニ至ルマテヲ運行ニ使用シ最後第六時期ヲ日
行間隔ト計リ支障回復ヲ用ヒ故ニ如此大輸送ニ在テハ一時期ニ



運轉ニ一三回ノ點ヲ設ケテ一列車何回ヲ發送シ得ルヤヲ定
算定ヲ爲サント欲スレハ却テ
混雜ヲ醸成シ恐レアラ
註一列車ヲ出發シ後次ノ列
車出發シ得ル迄ノ時間ヲ間
隔時ト稱ス
今上圖ノ如キ鐵道線路アリト
セシカ其直線ヲ利用スルニ要ス實ニ支線ハ頗ル迂路タルニ似タリ然
同時ニ其支線ヲ利用スルニ要ス實ニ支線ハ頗ル迂路タルニ似タリ然
レモ其線ノ本線ニ後レテ着スルハ唯々第一次ノ列車ノミニコレテ其他
ハ連續到着シ得ルヲ以テ敢テ患トナスニ足ラサルナリ但シ支線ヲ以
テ運行スル列車若シ直線ノ一部ヲ使用セシトスルカ如クハ不可ナリ
今左ニ歐洲鐵道運行力ニ二例ヲ示サントス

第二例

千八百七十年普佛ノ役獨乙軍ハ北獨乙ノ鐵道線六條ヲ用ヒ十七日
間ニ左ノ八馬材料ヲ國境ニ輸送セリ
將一校ニ一萬六千人
下士卒一萬四千四百人
馬車一十三萬五千頭

名稱	獨	乙	日	本	比較ノ差
軌道ノ巾	一米四三五		一米〇六七		〇米三六八
軌道一米ノ重量	三三三吉匁		三〇吉匁五		價ノ差ハ少ナレバ之レガ爲メ負擔力ヲ減スル大ナリ
客車載力ノ比	一〇		六		
平時水平地ニ於テ法律ノ許ス一列車ノ最大軸數	一五〇軸				
軍用列車ノ最大軸數	一二〇軸				
全中等軸數	一〇〇軸		凡ソ五〇軸		2/1
尋常旅客車ノ速度	二時間七五吉米		新橋横濱間ノモノヲ以テスレバ		
全法律ノ許ス急行速度	一時間九〇吉米		一時間二三〇吉米		7.5/3ノ比ノナリ
最重列車ノ速度	全車ニ合四五吉米				
軍用列車ノ中等速度	全車ニ合二二吉米五				

右ノ比較ニ因テ見レバ一列車ノ搭載力ノ比ハ三二一〇ナリ予ハ日本現今ノ鐵道ヲ批難スルニ當テハ其言論ノ幾回重複スルモ敢テ之ヲ願ミサルナリ唯速ニ鐵道布設ノ目的ヲ改良シ幾何ガ軍用上ニ有益ナルニ至ラザレバ希望ナルノ外余念ナキナリ之ヲ爲スニハ十分軍衙キ關涉ヲ得ル可ラス

實ニ日本ハ鐵道布設ヲ最大緊要トナスハ國ナリ例ニ海軍ヲ以テ防禦セントスルニ至ル迄ハ數十年及ビ數千万ノ金ヲ費スヘシ而シテ之ヲ爲シ得ルニ至ル迄ハ陸軍ヲ以テ外寇ノ防禦ヲ爲シ得ル可ラス

獨乙ノ如キハ例ニ佛國ヨリ攻撃ヲ受クルモ其地點ハ平時ヨリ預メ之ヲ知ルヲ得ヘシ

之レニ反シ日本ノ如キ島地ニ在テハ預メ其地點ヲ確知スル能ハズ故

三軍隊ノ何以ハ地點ニモ速ニ到達シ得ルヲ要ス之レカ爲メヨハ有効
 大抵鐵道ヲ有セサル可ラス
 日本現今ノ鐵道ハ師團準備ニ一師團ヲ送ルニ二十日以上ヲ消費ス
 如此鐵道ハ軍用上ニハ毫モ益ナシ
 故予ノ最モ希望スル所ノモノハ効程大ナル鐵道以テ二線ヲ以テ本
 土中央ヲ貫通スルモノアリ
 若シ本土中央ニ大ナル首線ヲ設ケレハ之ニ連繫シテ漸次ニ支線ヲ
 得ルニ至ラズシ此支線ハ後來變シテ一大線トナルヲ疑ナキナリ
 抑鐵道ヲ軍用ニ供セシメタルハ平時ニ鐵道運搬ヲ頻繁トスル國ニ
 非ザレバ望ム可ラスナリ
 鐵道ヲ軍用ニ用テ爲ル得ル如ク平時
 材料等ノ貯蓄ヲ可クサルナラバ
 又戰時鐵道ヲ使用セシムルニ平時ニ以テ所要官衙ヲ設ケナカ

獨逸參謀本部ニハ鐵道課ノ設ケアリテ常ニ其準備作業ヲ爲ス
 夫以全國ノ鐵道線路總テ政府ノ統轄ニ屬所トナレバ其準備作業最モ
 容易ナク故ニ各國之ヲ實行セシムルヲ希望セリ然レバ其意ヲ遂ケ
 各國ニ即チ各國共ニ一節ハ官有ニシテ一部ハ民有ニシテ
 又假令ハ全線政府ノ所轄ト爲ス能ハザルモ平時其運行法ヲ規定スル
 事得ルニ至ルニ至ルニ至ルニ至ルニ至ルニ至ルニ至ルニ至ルニ至ルニ至ル
 素ニ戰時ニ在テ官有民有ノ別ナク之ヲ軍用ニ供スルノ條約ナルモ
 平時ノ運用區々ナルヲ以テ之ヲ準備ノ作業夫爲ス頗ル困難ノ事トナ
 ス
 獨逸連邦ハ世人ノ知ル如ク七十年ノ戰役後ニ成レリ而シテ其前ニ在

チハ單ニ同盟國ニシテ戰時互ニ援助スルキノ約アリ。然レハ鐵道運行ノ如キハ全ク各國各個ニ支配シ居レリ。然ルニ戰時ニ際シテハ普國參謀本部ハ全鐵道線路ヲ統轄スルヲ約ナリ。以テ之レカ準備モ亦ハ普國參謀本部ノ任タリ。其作業ノ困難ナル實ニ想スヘキナリ。然レモ其綿密ナル調査ノ効ニ因リ已ニ述ヘシカ如ク七十年戰ニ於テ獨乙軍ハ鐵道ノ大効程ヲ以テ運搬スルヲ得タリ。其數少カクモ以テ之ヲ利用之ニ反シ佛國ハ一政府ノ下ニ在リ其鐵道ハ地方ニ區分シ從ヒ各州ニ會社ヲ設テタリ而シテ會社ハ大ニ其數少カクモ以テ之ヲ利用スルハ方法ハ最モ簡ナリシカ如シ。然レモ七十年戰ニ於テ其運行宜キヲ得タリ。然レモ他ナシ平時ノ整頓好カリシモ軍人ノ用之レニ關涉セザルニ因リ。其數少カクモ以テ之ヲ利用スルハ大國ニ如キハ外見上鐵道ノ利用最容易ナルカ如ク何トナレハ大國ニ

美且一政府ノ支配スル所ナリ。如之ノミナラス政府ハ人民ノ事業ニ當リ關涉スルヲ習慣アレハナリ。然レモ七十年戰ニ因レハ却テ反對ノ結果ヲ來セリ。以上説ク所ニ因テ觀レハ凡ソ一國其鐵道ヲ戰時便宜ニ利用セントセハ平時ニ中央官衙ヲ設ケ之レカ準備作業ヲ爲スノ必要ナリ。瞭然タリ即チ獨乙參謀本部ニ鐵道課アル所以ナリ。此鐵道課ハ鐵道百般ノ事項ヲ負擔スルモノニ非ラス地方官ト協議ヲ爲スカ如キハ陸軍大臣ノ任トス故ニ此課ノ首ナル任務ハ平時ヨリ戰時ノ運行計畫ヲ爲スアリ。即チ總テノ材料ハ何時ニテモ集合シ得ル如ク各線路ハ急遽ノ場合ニ在テモ直ニ所要ノ方向ニ利用シ得ル如ク計畫シ以テ實際施行ノ際ニ當テ滯滞ナカラシムルニアリ。

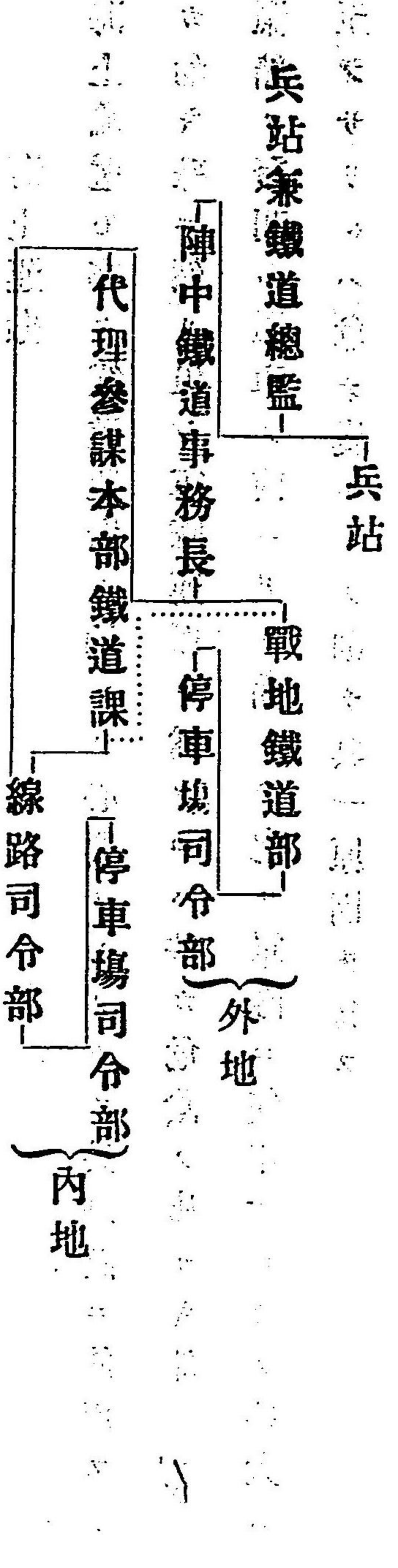
又獨乙ニ在テハ、鐵道ヲ各種ノ線ニ分テ而シテ首要ナル線ニハ線路委員ヲ常置ス、委員ハ參謀本部鐵道課ノ令下ニ屬シ、最大停車場ニ在リテ直接ニ運行作業ヲ爲ス、

參謀本部鐵道課ノ將校ハ各線路ヲ分擔ス、

以上述フル所ノモノハ平時ノ編成ニシテ即チ軍ニ準備過キタルナリ、

戰時大本營ニハ鐵道ノ事務ヲ監督スルモノ有ラサル可ラス、此監督者ハ又兵站事務ニ曉通スルヲ要ス、故ニ戰時大本營ニハ兵站兼鐵道總監ナルモノヲ置ク、此總監ハ自己ノ側ニ本部ヲ有ス而シテ兵站及ヒ鐵道ノ事務ハ本部内ニ於テ各分擔スルモノアリ、即チ鐵道ノ爲メニハ陣中鐵道事務長アリテ、万事ヲ整理シ、鐵道事務長ノ下ニハ又戰地鐵道部代理參謀本部鐵道課及ヒ線路司令部等ヲ置ク、線路司令部ハ平時ノ線路委員ニ代ハルモノニシテ、鐵道事務長及代理參謀本部鐵道課ニ兩屬ス、

戰地鐵道部長ハ專ラ外國鐵道ヲ利用スルヲ任トス而シテ其事業ハ内地ニアル線路司令官ト略ホ異ナルナリト雖モ其聊域稍廣キモノアリ、即チ材料人員ノ如キハ所要ニ應ジ自ラ徵集セサル可ラス、又要スルモノ多ク兵員ヲ請求シテ使用スルヲ得トシテハ材料等ノ事ニ關シ、代理參謀本部鐵道課ノ支配ヲ受クルナリ、職務連繫約左ノ如シ、



以上ハ鐵道ヲ軍用ニ供スルニ當リ所要ノ官衙ヲ略説スルモノナリ、鐵道運行ヲ爲スニ當テハ軍隊ノ徒步行軍ヲモ並用スルヲ良トス、日本

大規模な海上輸送を以て鉄道に負荷を軽減せしめ得故に左に海運の事項を述べ置かざるを得ず。

海上運搬

海上輸送も亦々鐵道運搬と均しく必要とする兵站路に使用スルカ如キ殊に然し但し軍隊運搬の爲にハ些カ危険ノ虞ナキ能ハス。汽船の發明ハ汽車ノ前ニアリ而シテ之ヲ軍隊ニ使用スルコトノ盛大ニ至ラザリシハ危チ虞ルモノ則チ其一原因ヲ爲ス。

歐州各國ト雖モ平時ヨリ大軍隊ヲ輸送スルニ足ルノ運送船ヲ有スルモノナシ就中佛國ハ最多數ヲ有スルモノニシテ即チ一回ニ二師團ヲ搭載し得ルノ船數ヲ有ス然レモ之ヲ其全國ノ常備兵步兵四十師團及多數ノ騎兵師團ニ對シテ比較スレハ唯僅ニ其二十分一チ一回ニ輸送し得ルト云フニ過キス。

故ニ何レノ國ト雖モ大軍隊ノ海上輸送ヲ爲サント欲セハ須ラク商船ヲ用ヒサル可ラス然ルニ商船ヲ以テ軍隊ヲ輸送セント欲セハ殆ント内部ノ結構ヲ改造セサル可ラス單ニ兵員ノミニ供スルモ其搭載力ヲ大ナラシメントセハ内部ヲ改ムルヲ要ス況ンヤ馬匹ノ輸送ニ於テチヤ。

日本郵船會社所有ノ汽船中大ナルモノハ稍多クノ人員ヲ搭載スルヲ得然レモ其數甚少又會社ハ馬匹ヲ搭載し得ルノ船ヲ一隻チモ有セス是レ本國牧畜ノ盛ンナラサルニ原因ス。

凡ソ戰時海ヲ利用セントスルノ國ハ必要ノ際其船ヲ集合スルノ點ヲ預メ定メ置カサル可ラス是レ參謀官ノ爲スヘキ準備作業ニシテ國防策ニ連繫ス即チ某會社ノ何船ハ戰時某點ニ集合スヘシト云フカ如キハ平時ヨリ命シ置クヲ要ス勿論之ヲ撰定スルハ兵略上緊要ノ地點ニ

又テ鉄道ノ交通便且ツ衛戍地ニ近キヲ要ス
 日本ノ船舶集合所ハ閉塞シタル内海ニ非サレハ不可ナリ予ハ思考ス
 其船舶ノ一部ハ必ス下ノ關ニ集合スルヲ要スト而シテ如此要點ニハ
 平時ヨリ乗船上陸ヲ便スルノ準備作業ヲ爲サント可ラス予ハ未ダ其
 設テアルヲ聞カズ現ニ實見ニ由レハ僅々馬六頭ヲ搭載スルニ數時間
 ヲ消費セリ見ヨ歩兵大隊ニハ六十頭ノ馬匹アルコトヲ之ヲ搭載スル右
 以如クナレハ二三日ヲ費スヘシ
 抑モ軍隊ヲ常備スルハ美觀ノ爲メニ非サルナリ苟モ之ヲ作戰ニ使用
 セヨト欲セハ其準備ナクモテ豈可ナランヤ
 各船ノ搭載力ハ各異レリ而シテ其大ナルモノ載力ノ強キハ當然ナレ
 且乗船上陸ハ却テ大ナルニ從ヒ困難ナリ
 其準備ハ先ツ船ノ總數ヲ知り各船ノ搭載力ヲ定メ而シテ後運搬ノ計

書ヲ爲スニアリ

又乗船上陸ヲ便ニスルニハ廣大ナル地境ヲ要ス殊ニ日本ノ諸港ハ船
 ノ一端ニ非サレハ投錨スル能ハサルヲ以テ各船ハ錨點ノ周圍ヲ巡回
 以得ル如ク即チ船長三倍(少極)ノ間隔ヲ以テ繫泊セサル可ラス
 故ニ大軍隊ヲ乗船上陸セシムルニハ廣大ナル地點ヲ撰定スルヲ要ス
 而シテ又暴風等ノ關係ヲモ考慮セサル可ラス
 狭少ナル灣港ニ於テ大軍隊ノ乗船上陸ヲ行ハント欲セハ之ヲ數梯團
 ニ分タサル可ラス然ハ則チ大ニ時間ヲ費スヤ明ナリ
 日本ノ海岸ハ多クハ乗船上陸ニ便ナラス故ニ中土貫通ノ鐵道効程大
 ナルヲ得且ツ内海ノ閉塞完全セハ海岸ノ不便ハ敵ニ歸シ我カ爲メニ
 利トナルニ至ラン即チ鐵道ハ内地ノ交通ヲ容易ナラシメ加フルニ海
 運ヲ以テ之ヲ補助スルヲ得ヘケレハナリ然レ且鐵道ナク要塞ナキ現

今ノ景況ニ在テハ何ニ頼テカ此利ヲ得ヘケンヤ
 已ニ前述スル如ク熱心ニ海運ニ盡力セシ佛國スラ一回ニ二師團以上
 ノ兵員ヲ輸送スル能ハス然レモ佛國ハ日本ヲ距ル遠シ而シテ日本ニ
 接近スル他ノ諸國ニ於テ如此多數ノ運送船ヲ有スルモノアルヤ予ハ
 未タ之ヲ聞カス故ニ日本ニ來ル敵ハ偶々大ナルモ一回ニ二師團以上
 來ルノ患ナシ此ヲ以テ日本ノ鐵道布設宜ヲ得ハ敵ノ第一團隊ニ優ル
 兵力ヲ集合スル容易ナリ之ニ反シ現今ノ如ク九州南端鹿兒島ニ警ア
 ルヲ聞キ始メテ歩ヲ起シ徒行之ニ赴クガ如クソハ敵ハ其間ニ第二第
 三ノ團隊ヲ其地ニト陸セシメ得ルナラン
 敵若シ日本ヲ攻撃セントセハ必ス先ツ近傍便宜ノ地ニ集中點ヲ撰定
 スルナラン豈ニ本國ヨリ各梯團ノ軍隊ヲ逐次ニ輸送スルカ如キ迂策
 ナ取ルモノアラフヤ故ニ日本内地ノ交通不便ナレハ隨テ其國防困難

ナリ

鐵道破壞

凡ソ戰時ニ利用シテ大ナル益ヲ得ル鐵道ニ若クモノナシ故ニ要スル
 時敵ニ之ヲ利用セシメサル爲メ破壞スルノ方法ヲ知ラサル可ラス
 若シ鐵道某部ニ大破壞ヲ施セハ之ヲ修理スル容易ノ事ニ非サルナリ
 單ニ敵ノ交通ヲ妨クルカ爲メニハ材料ヲ除ケハ足レリ故ニ其破壞ヲ
 爲スニ當テハ後來我レニ害ヲ爲スコトナキヤ否ヲ考慮セサル可ラス
 夫レ下級ノ指揮官ハ首長司令官ノ企圖ヲ洞察スル能ハス退却ニ際シ
 鐵道橋或ハ隧道ヲ破壞シ之レカ爲メ後來我レニ大害ヲ來スコトアルヤ
 モ知ル可ラス故ニ鐵道毀壞ニハ一原則ヲ建ツルヲ要ス獨乙國ノ原則
 左ニ如シ

其一 數週日或ハ數月間若シクハ永久ニ鐵道ヲ破壞スルハ首長司令

或ハ軍司令官若シクハ獨立シテ作戰スル軍隊ノ司令官ノミ之ヲ爲スヲ得

此場合ニ在テハ專門ノ兵種ヲシテ破壊セシムヘシ

其二 數時間若シク一日間鐵道ヲ閉塞(破壊ニ非ス)スルハ其情況ニ因

リ下級指揮官之ヲ爲スヲ得然レモ騎兵斥候ノ如キハ指揮官ヨリ命

ヲ受クルニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス

下級指揮官ノ爲シ得ヘキ閉塞ハ我戰線ノ内外ニアルニ從テ之ヲ種

別ス

甲 我作戰線内ニ在ル場合ニ於テ我軍前進スルモハ之ヲ爲スヲ得

ス休戰ノ際ハ一時之ヲ爲スヲ得又若シ我軍退却スルニ際シテハ常

ニ之ヲ爲スヲ得

乙 敵ノ作戰線内ニ在ル場合ニ於テハ常ニ之ヲ爲スヲ試ムヘシ

註
軌鐵ヲ除キ
或ハ表面
ニ少許ノ破
壞ヲ爲スニ
過キサルモ
ハ之ヲサレ
閉塞ト云フ
入ラサルナ

註
休戰トハ圖
城ノ如キヲ
云フ

如此任務ハ多クハ騎兵ノ負擔スル所トス故ニ多ク鐵道ヲ布設セシ地
方ニ於テ作戰スル時ハ騎兵ヲシテ一時鐵道ヲ閉塞シ得ルノ材料ヲ貯
ヘシムルヲ要ス
騎兵ノ爲スヘキ破壊ハ一時ニシテ表面上ノモノニ止マル決シテ大破
壞ヲ行フモノニ非カルナリ即チ術工物ヲ破壊スルハ工兵科ノ任トナ
ス
然レモ唯一二ノ軌鐵ヲ除キシノミヲ以テ其閉塞足レリトスル能ハス
戰時軍用列車ハ常ニ軌鐵若干ヲ携行ス是レ此等ノ妨害ヲ顧慮スレハ
ナリ
之レニ反シ作業容易ニシテ而シテ大功ヲ奏スルモノハ轉道機(軌鉄ヲ
左右スルノ機械ヲ破壊スルニアリ
若シ止テ得ス軌鐵ヲ除去スルヲ以テ限リトナスモハ其近傍ニ衛兵ヲ

配置を以て敵の修理を妨ぐべし列車中ニアル敵兵員ニハ自ラ

限テルヲ以テ場合ニ因テ之ヲ爲スハ困難ニアラハルナリ

電信ニモ亦タ鐵道ト均シク破壊ノ原則ヲ設クヘシ殊ニ電信ニ在テハ

後來ニ感ズル利害ヲ最モ熟慮セテ可ラス故ニ鐵道ニ於ケルカ如ク

多クノ規則ヲ定ム能ハス其概略左ノ如ク

各軍隊ノ指揮官ハ電信若シ敵及ヒ其人民ノ使用ヲ得ヘキモノハ常

ニ其交通ヲ切斷スルヲ試ムニ反シ我用ニ供シ得ルモノハ

勉メテ之ヲ掩護スヘシ

電信ノ交通ヲ絶ツニモ一時或ハ永久ノ差別アリ而シテ交通ヲ絶ツニ

ハ電信線ヲ破壊セザルモ之ヲ爲シ得ヘキ方法數種アリ即チ其一ハ常

ニ騎兵ニ携帯セシタル所ノ銀ノ細線ヲ以テ電氣ヲ地中ニ通竄セシ

註
銀線ノ一端
ヲ電信線ニ
纏結シ他端
ヲ地中ニ埋

ルニアリ此法ハ電線切斷ニ比スレバ之ヲ發見スル難キヲ以テ其利頗

大ナリ

其二ハ敵ノ通信ヲ奪フニアリ即チ我軍敵ノ交通線間ニ潛入シ此處ニ

新ニ傳所ヲ設ケテ以テ諸方ヨリ來ル敵ノ通信ヲ奪フニアリ然レモ是

等ノ事項ハ専門家ノ説明ニ讓リ茲ニ細説セズ

軍隊退却スルニ當テ電信ノ交通ヲ絶ツハ後衛ノ任ナリ即チ後衛ハ電

信器械ヲ携持シテ退クヲ要ス

作戰軍隊ニ備フハ電信器械ノ數ハ自ラ限リアリ故ニ傳所ノ増加スル

ニ從ヒ地方ノ器械ヲ利用セサル可ラス然ルニ退却軍ノ後衛常ニ其器

械ヲ持去レハ線アルモ用ユルニ道ナシ恰モ鐵道線路現存スルモ材料

ハ敵ト共ニ退却シ之ヲ交通ニ使用スル能ハサルト一般ナリ

電信線ヲ永久ニ破壊スルノ原則ハ鐵道ニ異ナルナシ細説スレハ首長

司令官若シハ獨立シテ作戰スル軍隊ノ司令官ニ非サレハ之ヲ決行スルヲ得ス
凡ソ軍隊若シ鐵道或ハ電信ノ交通ヲ絶テシキハ必ス其場所ト情況ノ報告ヲ怠ル可ラス而シテ之ヲ通スルハ自己ノ長官其近傍ニ働作スル軍隊ノ司令及ヒ鐵道司令電信提理等是ナリ
今ヤ好時期ナルヲ以テ左ニ道路橋梁ノ破壞ヲ述ヘントス

道路及橋梁ノ毀壞モ亦タ能ク將來ノ利害ヲ熟慮シタル後ニ非サレハ決行ス可ラス

例ヘハ前哨司令ハ自己ノ便宜ノ爲メ其前方ノ橋梁ヲ破壞スルコトアリ然ルニ其翌日我軍若シ前進セハ其害ハ忽チ我軍ノ蒙ル所トナル是等ハ中隊長或ハ前哨司令官ノ如キハ首長司令官ノ企圖ヲ洞察スル能ハ

サルコ因ル故ニ如此破壞ヲ爲シ得ルノ權限ヲ定ムルヲ要ス即チ概略左ノ如シ

下級ノ指揮官ハ擅ニ破壞ヲ行フヲ得ス高級司令官ノ命令ニ因テスルヲ例トス

註 戰休止ノ際トハ要塞ヲ攻圍セル時ノ如キヲ云フ

運動戰ニ在テハ殊ニ破壞ヲ深考スヘシ之レニ反シ戰休止ノ際ニ在テハ之ヲ爲スコトヲ忘ル可ラス
我軍戰術上ノ守勢ヲ取ルルハ破壞ヲ爲スモ害ナシ之ニ反シ兵略上ノ守勢ヲ取ル時ハ破壞ヲ行フヲ得ス

註 將校中或ハ之ヲ誤解セルモノアルカ如シ或曰ク日本内地ハ交通不便ナルヲ以テ敵ノ運動ヲ困難ナラシム故ニ我ニ利アリト嗚呼過テル哉是レ全ク反對ノ事理ナリ
日本ノ如キ環海ノ國ハ終始戰術上ノ守勢ヲ取ルハ不可ナリ必

ス兵略上ノ守勢ヲ取り以テ攻勢ニ轉シ敵ヲ殲クスヲ謀ラザル可ラス夫レ攻勢移轉ヲ謀ルハ際シ道路善惡ニ因テ生スル利害果シテ如何トナス交通ノ便ナルハ最モ希望スル所ニ非ヌヤ故ニ日本ノ將校ハ道路ノ改良ヲ熱心ニ希望セザル可カラサルナリ實ニ一道路ノ改良一路ノ新設ハ皆日本軍ヲ利スル所ノモ

頁數	行目	誤	正
十六	四	文障	支障
三十三	八	定ムルハ	定ムレハ

明治二十一年七月廿一日印刷
同年八月二日出版

印刷兼
發行者

滋賀縣平良

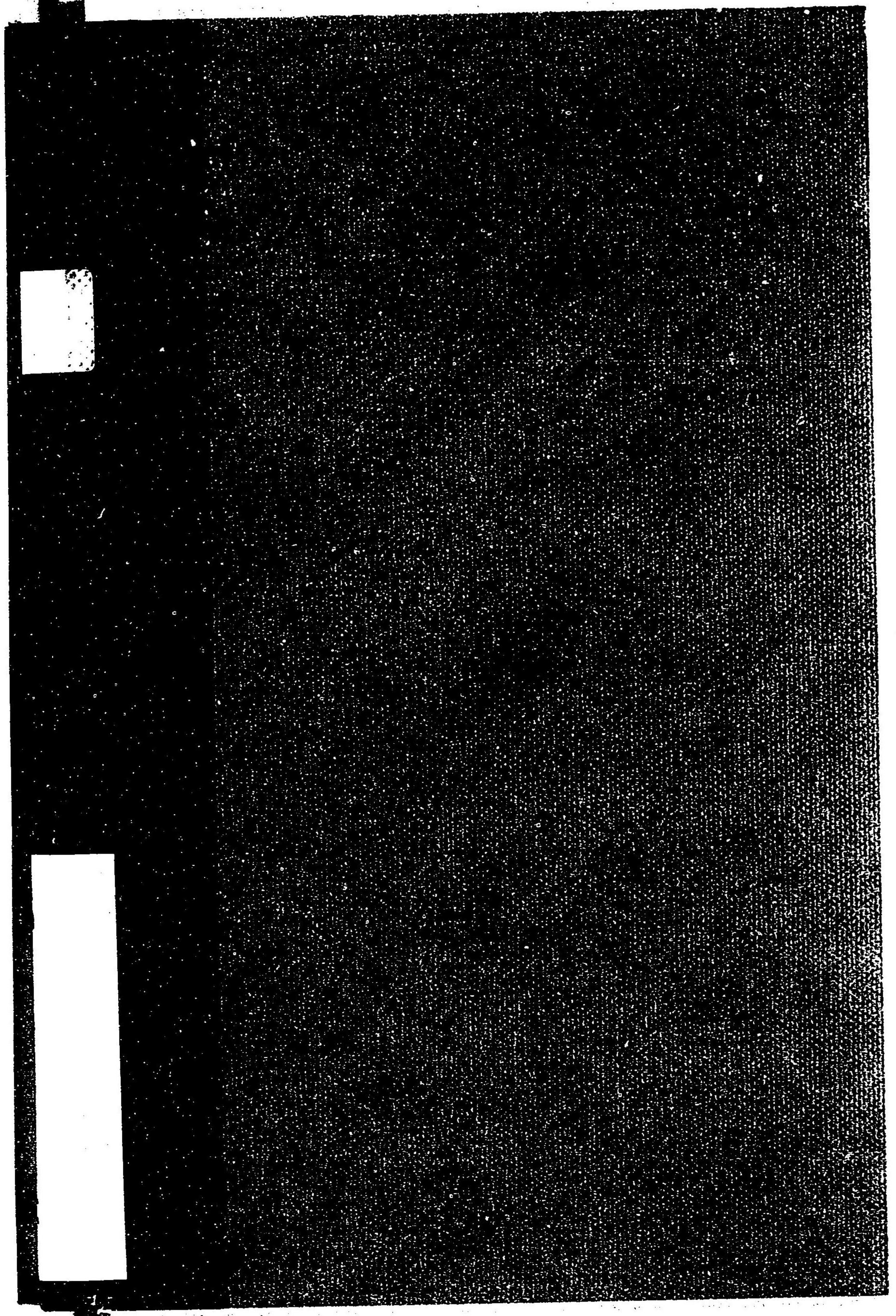
柴田源三郎

京橋區元數寄屋
西四丁目六番地

陸軍大學校御用印刷并ニ賣捌所 兵 林 館

臨海大學對 藤田中醫師 實地視 吳林 論

同 第八頁二 日出輝 與藤二十一 平八頁三 日出輝



17

11

参謀服務実施 2

国立国会図書館

